が運動に由て生ずる外壓と均等若くハ之を超過するに至るべし、此に於てか瓦斯の法則は全く其適用を失ふなり、此場合に於てハ最早其瓦斯の容積を保持する爲にハ外壓が關係せざる時にして、瓦斯は液化ゑたるなり、去らば瓦斯が液化するか否やは其内外壓の關係如何にあり、故に外壓即ち瓦斯のエネルギー猶他言すれば、温度の高くして内壓の之を超過すること能はざるに於ては、瓦斯を液化せしむること能はざるなり、故に液体とは一個の分子團體にして其分子が有する平均のエネルギーよりは其内壓即ち分子引力の强くして之に勝ること能はざる際を云ふ、畢竟するに瓦斯と云ひ液体と云ふも物體存在の限界的名稱にして、根本的差異を有するものにあらざるなり

印度の宗教（下）

巴城生

（三）多神敎　凡神的敎理は、その說く所悠遠にして且つ高尙なりと雖も、到底敎育なき人民の理會し得べき所にあらず。而も彼等は禮拜すべき或るものを要むること切なり。是に於てか、印度の宗敎の敎理には多神敎の分子を包括するの止むを得ざるに至りぬ。即ち彼等が森羅萬象を察し、諸種の勢力の流行せるを觀て、之を擬人し終に三億三千萬の諸神を想像せるも、亦た偶然にあらざるなり。斯くの如く、諸神の數多しと雖も、盡く之を最大の神の顯現に外ならずと信じき。

萬の流は四方の山岳に源を發すれども、皆な一の大洋に注ぐなり。

諸神の中に就て、印度人民の最も崇敬し、且つ最も勢力ある神とせるものは三体神（トリアドソマ）、蘇摩（グンガ）、瞿拏迦等なり。今その冥想せる觀念を究めて、以てその多神敎的敎理の一班を知らん。

三体神とハ阿耆尼（アグニ）（火の神）、因陀羅（インヅラ）（風の神）及び蘇利耶（スルヤ）（日の神）にして、後には梵天（ブラマ）（萬物創造者）尸（シ

婆（萬物破滅者）及び毗戍拏（萬物保存者）の三神と各〻相同じきものと認められき。何れも個々獨立の神にして、彼の三位一躰の神といふが如く合一あるにあらず。この三躰神の標號は三角形にして、アウムAUMといふ秘密なる文字を以て之を表はすなり。[illegible]三躰神の第一躰なる梵天は最大神の顯現にして、第二躰の尸婆は天地の破壞を掌る神なり。尸婆の像は人間の頭蓋骨の頸環を以て飾られ、小兒寡婦奴隷等の血はその要求する所なりとせり。第三躰の毗戍拏は大保護者にして、日の神を仰めらる。彼は三歩を以て蒼穹を討るといふ、即ち日出、正午、日沒是なり。幾度か大地に降臨ゑて、殘忍なる尸婆の手より大地を救へり。この降臨を化生（阿跋多羅）といふ。九回の降臨は既に過去に屬し、その事蹟はしく詩に詠せられ、第十回の降臨は尚ほ未來に在りて、その際には黄金時代到來すべしと信ぜらる。[illegible]今各神に捧げたる歌頌の一二節を擧げて、彼等人民の神に對する冥想を窺はんとす。[illegible]

因陀羅よ。火の神の双生兒よ。爾の母阿提瑟は、爾の生れたる時、山に生ひ茂れる蘇摩を爾に與へたり。げに、蘇摩は汝の火焔の爲めには生命の源にして、不死の氣力たるなり。爾は我等の保護者、辨護者、朋友、兄弟、父母を兼ぬ。爾は父の最も慈愛あるものにして、我等は爾に屬し、爾は我等に宿る。嗚呼、我等の讃美を容れて、汝の憐憫ある精神を我等に傾けよ。我等に一の罪あらば之を許せ。多くの罪あるも亦た之を許せ。今日も、明日も、何れの日も、我等を寛恕せよ。惡魔（尸婆を指す）も爾の權勢には敵することを能はず。爾の水の富より我等を奪はんとして無益の苦勞をなせり。地は爾の電光の下に震ひ、敵なる惡魔は刺され、碎かれて斃れ、その軍は潰え、其城砦は擊破せらる。こゝに於てか、久しく閉鎖せられたる水は自由に流行し、濠を打たせて地に降り、川を

張ちせ、波打ち泡立ちてゞ、大洋なる故家に歸り、雷神（因陀羅を指す）の戰勝を讃めたゝゆるなる。

又火の神阿耆尼に就て歌ふらく、

阿耆尼よ、爾は聖者たり、祭司たり、王者たり、犧牲の保護者たり。爾ハ我等の願ひを容れて、我等の讃美供物を天に運ぶ使者なり。爾は火より生じ、水より生じ、又阿練尼（アラニ）より生れたれども、爾は自ら至大なる神にして、生命不滅の給與者たるなり。爾の存在よりいへば一なれど、人間に對しては三なり。爾は大地に於ては火となり、大空に於ては電光となり、蒼天に於ては太陽となりて、不滅の三性を現示せり。爾は各家族の珍客にして、父たり、兄たり、子たり、朋友たり、恩者たり、又保護者たり、救主よ。至大なる主よ。爾の禮拜者を救へ、罪惡より脫れしめよ。我等死して薪の上に燒かるゝ時に我等と共にあれ。我等はこの形骸と共にその罪惡を燒まはし。而して我等の不滅の部分を負ふて、高く樂園に遊び、正義の人と幾久しく住はんことを希ふなり。

又蘇利耶なる日の神を歌ふて曰く、

曙の光を看よ。恰も傳令使の如く、高く蘇利耶を導き、人をしてその名も高き大神を仰がしむ。星辰は盜人の如く、暗夜と共に曙の光の前より沈み去り、曙の光は獨り國民の上に赫々たる火焰を放つなり。光り輝く蘇利耶は明亮々たる日の神なり。七頭の赤き牝馬はその疾馳する車を運び、爾は之に駕して七女と共に進む。我等は此下界の暗黑を超へて光明に昇り、爾の赫く軌道に至らまはし。嗚呼、太陽よ。爾は神の神にぞある。

三躰神に次ぐ神を蘇摩とす。抑も蘇摩は月草 Asclepiassacida の名にして、醱酵せる汁を有し、氣力を賦

與するものと崇めらる。禮拜者は蘇摩の杯を飲み乾して、歌ふて曰く。

我等は美味なる蘇摩を鯨飲して不滅に生長しぬ。我等は光明に入るを得て諸神を知れり。何ものの滅すべきものか我等を害し得べき。何もの、敵か我等を惱ませ得べき。嗚呼、不滅の神よ。我等は爾によりてすべての害毒を免るゝなり。

瞿拏迦は女神にしてゲンヂス河神なり。ヒマラヤ山の白雪皚々たる頂に於て、梵天の額より生れたりと信ぜらる。その河口より水源に溯ることは格別の功績なりと認められ、これを爲すには殆んど六年の長日月の苦辛を要すといふ。

以上の諸神の外に、牛は神聖なるものとせられ、足には油を注ぎ、角には水を注ぎて之を禮拜し、又星辰金石草木蜿猿に至るまで之を神とし崇む。

吾人ハ優婆尼沙土の教理に就て、印度の宗教の信仰個條と稱すべきものを追跡するを得べし。蓋し摩拏の法典には、之に關して明に記す所あり、以て當時の人民が如何なる信仰を有せしかを窺ふに足る。今之を分ちて六條となすを得べし。卽ち左の如し。

一、靈魂の永生卽ち永遠より存し永遠に至ることを信ず。

靈魂に二種ありと信ず。一は最高普遍の靈魂にして、他は生物の有せる各個獨別の靈魂なり。若し實躰にして永遠なるものならば、固より始あるべきにあらず、又終あるべからず。されば、靈魂ハ普遍なるものにもせよ、獨別なるものにもせよ、何れも常に存在し且つ永く存在せざる可らず。

二、宇宙を開發せる物質或は物体は不滅なることを信ず。

或る物質論者の說に據れば、此進化は物質の分子より生ず得べしといひ、又韋陀の教理にては、靈魂が幻象によりて擴がる時は、靈魂ろのものより生ず得べしといへり。蓋し何れの論者の立脚點も、印度哲學者の格言「無より有を生ずる能は

すに基けり。

三、靈魂は肉躰に宿りて心意と結合する時のみ動作するものなることを信ず。

靈魂は抽象的の觀念、知識なれども、感覺の外界的目的物と連關し、或る肉躰的形骸に包圍せられ、且つ心意 Manas と結合して始めて觀念、自識、感覺、知識を活動するを得べきものなりとせり。

四、靈魂と肉躰との結合は羈絆の結果なり。而して人間の場合にては不幸の結果なりと信ず。

斯く結合せる靈魂は個立を自覺し、苦樂の印象を感得するに至る。又こゝに行爲あるべく、その行爲は、善なるにもせよ、惡なるにもせよ、若し之を行へば、その結果は必ず自ら食はざる可らず。即ち若し行爲にして善ならば善報を享け、又若し惡ならば罪なはれざる可らず。

五、因果の理法に從ひ、靈魂が苦難と報酬との正當なる分配を受くる爲に、種々の生活を經過せざる可らざることを信ず。

行爲の應報は各自負擔せざる可らず。靈魂が苦難と報酬との境域に轉移する必要ある、之が爲めなり。この苦難と報酬との境域も漸次に應報を與ふる定なれば、單一の境域にてその應報完全するにあらず。必ずや種々の境域を通過し、漸を以て其終局に到らざる可らず。されば、印度教にては、各種の境域は實に天國若くは地獄に到る中間の踏臺に外ならざるなり。

各種の存在者の經過して最大神と合躰するに至る段階凡そ四あり。第一は神と共に合一の天國に住すること、第二は神に近似すること、第三は神の像に化すること、第四は最上神と完全なる合同をなすこと、即ち是なり。

六、靈魂の輪廻は、品性の盡く宇宙の靈魂に併呑せられ、吸收せらるゝまで、繼續すべきことを信ず。

靈魂が幾多の体より体に輪廻するは、實に世界に罪惡存するに因るなり。而して普通信ずる所に據れば、生物の生れ換るべき度數は八十四ラクス（ラクスは十萬の數を表はす）なりといふ。

現世に於ける不幸、疾病、運命の差異、氣質の變化等は、單に各靈魂が前世に於ける自由意志に基ける行爲の結果なり。されば、靈魂は自己の行爲の結果のみ當に堪ゆべきなり。之を例へば、自己の起せる運動力によりて、左右前後に振動して正まざるが如し。勿論、その運動は自己の前世に於ける行爲の結果にして、記憶すべからざる又既に過去に屬して左右すべからざるものなれば、その應報は現世に於て毫末も增減する能はざるものたり

吾人は以上列擧せる六個の信仰個條より、婆羅門敎の最大目的何れにあるやを知るを得、蓋し此敎の最大なる目的は、善惡何れにても各種の行爲を仰制することを人類に敎ゆるにあり。即ち好惡愛憎悉く解脫せんと欲する所なり。そハ、如何なる行爲も形骸を有せる靈魂の羈絆となるを免れざるものにして、之を解脫すれば總て各個品性の感覺を除去するを得、以て靈魂のみの狀態に復歸するを得べければなり。是れ即ち眞智(ブッダ)にして、婆羅門敎の最上利益なり、唯一の眞正なる幸福なり。一旦最上の神の吸收する所となりて各種の生活の境域を解脫せば、こゝに純正の生命を得、純正の觀念を得、純正の喜悅を得べし。無念無想以て無に生活せんとは、印度衆生の須臾も忘却する能はざる希望なり。

爾は爾の母なる地の唇の裡に入らんとせり。漠々たる地、これ永く親切なるを知らずや。地は滅亡の胸より爾を保護すべし、

とは、墓を開く時に歌ふ詩句なり。されば、彼等は不滅を信ずと雖も、永久の自覺者を信ぜざること明なり。即ち死は自覺の終なり。之を要するに、彼等畢世の希望は、成る可く迅速に一の生活より他の生活に移りて、終に梵天と稱する極無(インフィナイト、ナッシング)に吸込まれんことなりき。

救濟は信ぜられざるにあらず、然れども之は罪よりの救濟にあらず、精神的死よりの救濟にあらずして、生命その物の羈絆より脫出せんことを望めり。換言すれば、生活或は存在といふことは罪惡の報酬なりと信ずるが故に、自覺の生活より免るゝこと、即ちその救濟なり。

人若し失はれたる『者』を索めんと欲せば、先づ爾自身を失ふべし。爾を彼より分つものは卽ち爾自身なればなり。

果して然らば、彼等は如何にして救濟を得べきものと信ずるか。卽ち如何にして『呑み込まるゝこと』を成就し得べきか。(一)信仰に依れる救濟 Bhakti は、撰擇せられたる少數者に限るものにして、彼等ハ韋陀經に於ける紀事は、如何に妄誕なることも、如何に無理なることも、之を信仰せざる可らず。(二)行爲に依れる救濟 Karma は、多數衆生の救濟せらるべき方法にして、熱心なる祈禱苦行及ひ犧牲に依りて得らる、

ゲンヂス河に浴すること、神聖なる牛酪を食すること、韋陀經を讀む間呼吸を停むること、神聖なる牛の蹄によりて起れる塵埃を呼吸すること、『ウム』なる秘密なる語を萬遍なく繰返すこと、梵天を確然默想すること等は、彼等が救濟を得んが爲めに實行する所のものなり。

願くば我等をして光明ある神太陽に默禱せしめよ。萬物彼によりて光りまた生ず。萬物は彼より來り、彼に歸る。我等は我等の徐々たる進みを以て、その天の坐に進まんとするに際ち、我等の心と足とを導かんことを切に祈る、

とは、彼等が最も効驗ある祈禱として捧ぐる所。日々朝と午時と夕とに、百二十八度この祈禱を繰返すことハ、非常の功德として行ふ所にて、珍らしからぬことなり。

吾人若し印度の聖徒を看んと欲せば、路傍に之を求めざる可らず。人あり、裸体にて幾年か髮を梳らず、嚴然跪けるを見ん。彼ハ塵埃の爲めにいたく汚れ、容貌大愚の如し。常に韋陀經を飜き、これより目を離つこと稀なり。是れ婆羅門敎の完全なる徒弟にして、全く梵天に自身を失ひ、罪惡情食慾を感

せず、唯だ時に頭を擡げ、眼をかすめて、『予ハ神なり、予は神なり』とつぶやくのみ。

吾人は、以上記述せる所によりて、印度の宗教の大略を觀察し了んぬ。今やその道德的結果を一言すべき位地に達せるを以て、簡短なる批評をなし、以て此稿を終らん。

抑も婆羅門教は正邪の間に超ゆべからざる障壁を置かず、故に責任義務等の道念あるなし。卽ち道德上行爲に正邪の區別なしと極言し得べし。例へば、婆羅門族を傷くるか、或は牛を害することは、その罪死に當るとせらるゝも、虛言盜取、その他の罪惡は單に輕罪たるに過ぎず。若し博學なる婆羅摩人に、その盜みせることを或は虛言せることに就て、之を詰難するも、彼は冷然として答へん。『神は在さざる處なく、爾にも、我にも、吾人の周圍の事物にもあり。彼は我等の唇を支配し、手を自由にす、故に若し予にして盜し、また僞りしならば、その責は予を生活せしめ、予を行爲せしむる神の上にあるべし。』故に博士ケイヤルド氏はいへり。

凡神教は、自然の結果として、宿命倫理說卽ち自然の慾望より生ずる罪惡を寬容認許する道說に到達せざる可らず。是れ宗教上に善惡の標準確立せず、純正なる心と情慾の心と懸隔なきに至るに因るなり。最下の慾望も、最上の道義も、最賤の不淨も、最貴の仁德も、皆神の前には神聖と認めらるゝなり。

印度にては、宗教と道德とは全く離隔せることは、罪人の多分が婆羅門族の階級にある事實を以て、之を推知するに足る。之を要するに、印度人民の心は、或る點に於ては著しく敬神的なり、然れども或る點に於ては著しく不道德なり。卽ち彼等は最高の思想と最卑の行爲とを併有せり。印度に放蕩淫亂、虐殺等の罪惡多きも、畢竟これが爲めなり。

附言。此稿を草するに際し、二三の著書論文等參考

する所ありしが、重にウィリアムス氏著印度教及びパアルレル氏論文婆羅門教に就て貧ふ所多し。尚ほ婆羅門教と佛教との關係等を論ずるに、婆羅門教を論ずるに當りて必要なりと雖も、長く貴重なる紙面を占領する憚多きを以て、今は之を畧し茲に擱筆す。請ふ諒せよ。

巴城生附記

韓文公

杏城生

予ハ曩に伯夷頌を讀んで韓文公の一生を思ひ、その自信と本領とに就て少しく言ふ所あらんと欲し、依て彼が自信に就ての所論は、既に前號に於て之を公にしたりき。其後投ずるに彼が本領に就ての所論數章を以てせんとしたりしが、尚之を確めんが爲め再び歷史を精細に閲し、且世上に於ける彼が評論を檢したりき。然るに予は世人の眞に彼が本意を領するもの少なくあハれや、彼が評論は種々の汚名と謬りたる觀察とを以て滿されたるに驚きぬ。是固より世人の彼を知ること深からざるによるべしと雖ども、抑又文公の精細なる傳記なきによる。北村紫山氏の世界百傑傳に文人として韓退之の傳を載すと雖ども、文公の年譜を畧し、この間に加ふるに、彼が文を以てしたるに過ぎざで（又柳子厚の傳中彼が文を論ず、又國民の友（二五二―二五八）に於て、山路愛山が「唐宋八家文を讀む」中、韓愈を論ずるを見たり。其言ふ所、多からざるに非ずと雖ども固より氏が告白する如く八家文を基礎として論ぜられしものなれば、之を責むるに其精細なる傳記と明察なる觀察とを以てするは甚だ酷なりと云ふべきなる可らず。其他三宅雪嶺氏の王陽明、及び諸經學文章家の講說文話に、哲學上或ハ文章上より彼を論ずることなきにあらねど、要するに彼が一生を通觀して、其本意を世に紹介したるにはあらず。其他世人に至ては、上襄陽書等の諸上書を見ては、彼は恥を知らざる乞食學者なりと稱し、原道等の諸篇を見ては老佛嫉ひの儒學者なりと稱し、佛骨表等を見ては、心性激烈なる諫爭の臣のみとなすもの多し。而も彼は潮州刺史を以て終れりと思ふものさへあるを見るで予は彼の世に知られざるを悲むものなり。依て聊か、彼の本領に就ての所論數章を變更して、こゝに彼が評論体傳記となし、以て彼が本意のある所を論せんと欲す。

昔は英の文豪マコレー卿流麗の文を以てクライブ傳を作り、英人初めて彼が東洋に於ける大事業に耳を側くるに至れり。予今此傳を草す、何ぞ此くの如く多きを望まんや。予は寧、只彼を知らんと欲するものをして、彼の本意を領せしめ、少きく世人の感を解くを以て、滿足するものなり。材料の如きは完結の上之を公にせん。予は他日簡潔なる文章薩峰氏の如く、流暢なる行文愛山氏の如き人ありて鋭徹なる眼光と卓越せる見識とを以て文公を世に紹介せんことを待つものなり。（一月十六日）

緒言